

## 自動車車の任意保険はこれでいいのか。

道路交通法が 1960 年に施行されてから既に 55 年になった。この法律の趣旨の一つは国民すべてを前科者にしないためのものだ、とさるベテランの弁護士から聞いたことがある。確かに 20 km オーバーで前科者になってはたまらない。これを避けるために別の法体系が作られたのだという。このためか時代に合わなくなって何回となく改正されて、今の日本の法律の中では最も改正回数が多いらしい。いわばつぎはぎだらけのパッチワークみたいなもので、畑の真ん中に一時停止の標識があったり、何で？と首を傾げたくなる標識も少なくない。しかもこんな所に限って、警察官が陰に隠れて取締りをやってるケースも多い。小生はこれは警察の小遣い稼ぎだと言って警察官を叱り飛ばしたことが何度もある。行政というものは国民が等しく納得できないものには、必ず裏があると思っているからだ。ここにも恐らく官僚の前年実績達成という、いわばノルマが隠されているのだろう。

★ ★ ★ ★ ★

ところが道交法とは異なり、自動車の自賠責保険に関しては、改正の話は聞かない。何度か値上げされたことがあったろうか、その程度しか記憶にない。クルマに保険加入が義務付けられるというのは、いわば一家に 1 台時代の名残で、国民皆免許に近づいている今日においては、こんな古い制度でいいのだろうか、小生はいつも疑問に思っている。保険はクルマに入るのではなく、いわば免許証に対して加入すべきと考えるからである。百歩譲って、自賠責はたまたま他人にクルマを貸した際、その人間が事故を起こしたときを想定すれば現状でいいのかもしれないが、免許証の保険があれば二重にカバーできるはずだ。しかし任意保険はこれでいいのか。

小生は個人的な都合で 3,300cc のワンボックス車に乗っているが、これでは小回りが効かず、チョイ乗りには誠に不自由である。そこで軽自動車をもう一台購入しようと思ったことがあった。駐車スペースは玄関先に確保できそうだったから、それほど経済的負担にはならないですむ。しかも任意保険は 60%引きだから、月々 3,000 円程度である。そこで保険会社に聞いたところ、2 台目のクルマは割引ゼロから始まるということだったので、この計画は頓挫することとなった。

★ ★ ★ ★ ★

しかしこの保険制度に筆者は納得できない。何故、任意保険も免許証ではなくクルマに加入しなければならないのだろうか。事故を起こすのはクルマではない。運転者である。任意保険に関しては免許証にかける保険があってもいいのではないだろうか。現実にはゴールド免許を持っていると割引率が更に増す制度もある。これは損保会社によるクルマと免許証の概念の、都合いい混同であるように見える。任意保険を免許証本位に変えれば、個人で 2 台の車を持つ人間も増えるだろうし、経済効果も加わる。個人にとっても例えば旅行先でレンタカーを借りる際にも、いちいち保険に加入する必要はなくなる。しかしこうした商品が生まれえないのは、それ

なりの理由があるのだろう。つまり保険会社にとってうまみがなくなる。さらには、恐らく裏側で役所と保険会社が馴れ合って、適切な指導を行ってないのだろう。

しかもクルマの重量税に関してはもっと問題があると思う。これはクルマの重量に応じて支払う税であるはずだが、現実にはそうになっていない。まず新車よりも古い車に多く課税するシステムになっており、さらに軽自動車は軽い税で済むことは納得できるものの、ハイブリッド車は軽自動車に近い軽税率になっている。つまりこの税は重量税という名称は名ばかりで、実際には恣意的車税なのである。政府の課税はまことにいい加減で、常に国民が納得できるものではない。アルコール分ゼロのビールにも酒税として課税し、これでは税の公平感を著しく損ねていると言わざるを得ない。これでは脱税に走る人間を政府が促進していると思えないのである。しかも2017年4月には消費税が10%になる。この重税感を払拭するため、食料品には軽減税率を適用させることが提案されたところまではよかったものの、その手法を聞いてあきれた。国民背番号で節税するというのである。ではこの読み取りを行うシステムの負担は誰がするというのか。さらにこのカードを買い物のたびに持参することに問題が無いと考えているのか。つまり背番号カードはその程度の軽いものなのだといいたいのだろうか。このデータが漏れたとき、誰がどういう形で責任を取るというのか。コンピュータのイロハも分かっていないお役人の頭の程度が知れるとしか言いようが無いと思っていたら、もう撤回された。こんなもの聞いたときから出来っこないと思っていたのは、ほとんどすべての国民であったろう。政府のエライさんよ。「もう少しまともなアイデアを出さなかったら、給料分働いていませんよ。」と言いたい。

★ ★ ★ ★ ★

一方、生命保険に関しては外国資本の増加によって、割安な保険が随分と増えた。日本の役所は外国資本が加わらないと、旧態依然の制度が改正されることはない。なんとも情けない限りである。政府はまだ鎖国時代の悪弊か、さもなければ不平等条約の禍根が息づいているようにさえ見える。金融自由化も、農業の自由化も、さらには海外派兵も、いわばアメリカの言いなりになっているようにさえ見える。これでは独立国とは言いがたい。安倍晋三はアメリカ議会で、ご機嫌とりに夏までに安保法案を可決することを約束してきた。ここにいたってはアホの極みである。いやしくも独立国の首相ともあろうものが、本国よりも先に海外で、こんな約束をしていいものなのだろうか。小生にはどうしても合点が行かない。

★ ★ ★ ★ ★

小生が過去20年来お付き合いさせていただいているトマト農家がある。ここのご主人はもう10年以上前から、農業の自由化は怖くないと言っておられた。そして問題なのは、補助金漬けになっている農業全体だと言っておられた。さらに農家は他人の真似をすることしか知らない。他人がトマトを作ればみんなトマトになる。他人がコマツナを作ればみんなコマツナ。もちろん敵地適材はあるから、やむを

えない点もある。しかしこの農家のご主人は、こうも言っておられた。トマトは病気にかかりやすい。このため薬剤を散布するが、すぐにその薬剤に対する耐性菌が出てくる。やむなくこの耐性菌に効果のある薬の発見に努めているいろいろと試してみる。これだと確信してその薬を使い始めると、近所のトマト栽培農家はすぐに真似をして同じ薬を使い始める。ところがその耐性菌もまた現れ、これはその地域全体にすぐに広がり始める。やむなくまた次の薬を購入するハメになるが、もう顔の知れた町内では購入しないという。また真似されて、耐性菌との追いかっことを続けなければならなくなるためだという。2015年夏は猛暑が3週間ばかり続いたと思ったら、雨が多くなり、晴天を見ることさえ出来なくなった。こんなときはトマトが一番病気にかかりやすいときである。小生はこの季節、白内障の手術をしたためにトマト農家のご主人と顔をあわせる機会がなくなってしまった。トマトがどうなっているか気にかかる。群馬県の安中付近のトマト農家では、病気が蔓延してトマトはすべて枯れてしまったと聞いた。農家はサラリーマンと異なり、作物が出来なければ収入はゼロになる。そしてこの収穫は、すべてお天道様しだいである。税金の3分の1を食いつぶしているお役人さんよ、もう一度胸に手を当てて、あなたの人生はそれでいいのか、考えていただきたい。そして職業政治家のエライさんよ。あなたの輝かしい人生に偽りが無いかを、聞いていただきたい。

★ ★ ★ ★ ★

かつてコンピュータが発明された頃、IBMにかなう日本企業はなかった。このため政府と一体化して日本企業は米国を追いかけた。しかしやがて日本はアメリカを追い越すほどの実力をつけていった。貿易の自由化が、日本企業の潜在力を引き出したことも否定できない。マネッコは簡単でありマネッコ韓国、マネッコ中国は安い労働力で、世界へと乗り出した。だが頂点に立ったとき、マネッコは許されない。日本も同様である。頂点に立ったそのときから、歩みは遅くなるのが常である。日本の家電メーカーの苦戦は続き、新たな利益を求めて、暗中模索が続いている。

日本の農業も、農民が自ら努力するような体質になれば、TPPは怖くないとトマト農家のご主人は語る。人に先駆けることはたやすくはない。だがもしどこかに矛盾を感じたとき、そこには矛盾を乗り越える新システムがあり、新商品が必ずあるはずだ。否、なくてはならない。しかしお役人は既存の法律を勝手に解釈して常に庶民を虐める方向に舵を切る。そして日本の役人はクレームなり、問題点を指摘する市民がいて、初めて自分たちの仕事生まれると考えている。『ことなかれ主義者』が多いようにお見受けする。現在、役人の仕事で最も大事なことは、今後起こりそうな案件を、発生する前に推察し、対策を立てておくことであることを指摘しておきたい。クルマの任意保険しかり、TPPしかりなのである。やがて問題となるであろう窒素酸化物、メタンガスしかりなのである。そして窒素酸化物とメタンガスの危機が迫っていることを最後に記しておこう。